

# 草庵仏教

第224号  
(発行日)

2009年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日  
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と  
12日。午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 佛の本願のお心

親鸞聖人のみ教えを聞かせていただきますと、私たちは阿弥陀仏から願いをかけられている存在であり、しかもその願いは「こうあってほしい」「ああなあってほしい」というような単なる希望とか要望と違ったようなものではないのであります。

私たちがかける願いは、個人的なあるいは利己的な願いであったり、しかも単なる願いだおれに終わる場合が多いと思います。

たとえば親が息子に「就職先は大企業に勤めてほしい、生活が安定するから」と願ってすすめる時、それは子の将来を案じる親心でありましょうが、やはり個人的な願いにほかなりませんし、あるいは自分たちが老後になったら面倒をみてくれるような経済力のある人間になってくれたらという自分の都合が入っているものかもしれません。

また、自分が自分に願いをかけるようなことであろうと

思います。「私はパイロットになりたい」とか「将来は医者になりたい」とか、「すてきな彼女にめぐりあいたい」とか、いろいろな願いを心にいだくことがあります。

しかし、こうした願望や要望が実現するとはかぎりません。むしろ願い通りにいかない場合が多いのではないのでしょうか。

ところが阿弥陀仏の願いは、弥陀の誓願力ともいわれるように、「汝を浄土に生まれしめなければ私自身が仏の座にはつかない」「必ず助ける」とまで私たちに約束された阿弥陀仏の誓いであり、しかもこの約束はすでにその約束通りに私たちを今ここで助けたもう能力となつてまします。それゆえ親鸞聖人は「本願力」とお示し下さっています。

この阿弥陀の本願力が私たち一人一人に今ここに働きかけ、「南無阿弥陀仏」と私たちに喚びかけてましますこと

と、これこそが真実であり、かわらぬまことであり、驚くべき恵みであります。

にもかかわらず私たちは、私たちが値いなくしてこのよいうな恵みの中におかれながら、そうともしらず、めいめいもちの願望や欲求を叶えようとばかり計らっているのではないのでしょうか。いわば「自分の願望や欲求を実現することが幸せである」とのみ思い込んでいるのではないのでしょうか。

〈医者や弁護士になりたい〉や〈芸能人やスポーツの選手になりたい〉などの個別的な願いから、より一般的に、健康で長生きをしたい、楽しい家庭を築きたい、趣味娯楽を楽しみたいなど、形は色々ありますが、つまるところは「自分(たち)の願い」であり、その願いを中心に生きようとしているのであります。

ところが阿弥陀仏が私に掛けてくださったっている願いは私たちの個人的なさまざま願望とは違います。

それは仏説無量寿経の中に阿弥陀仏の願いを第十八願として釈尊がお説きくださった本願文によつて知ることができますが、それには阿弥陀仏は「十方の衆生よ、我が国に生まれんとおもえ」と仰せくださるところの、万人に対する普遍的な願いであります。すなわち「我が誓いをたのんで浄土に生まれようとおもえ」と、私たちに勧めくださっています。しかも、浄土に生まれようと願えと仰せくださる背景には、私たちがまるまる引き受けて浄土に生まれしめたもう大悲の力をご自身に成就した上で、「汝を助ける」と私たちに喚びかけてまします。

## 《 春季彼岸永代経法要 》

三月二十二日 (日)

午後二時始まり

ではなぜ阿弥陀仏はそのよ

うな誓願力をもって私たちに働きかけられるのでしようか。

それは私たちの迷いと苦悩の根源を知り抜かれて救おうとされるからでありましよう。

私たちは「生まれて死に、死んでどこへいくのか」という、人生全体が大いなる闇と不安に囲まれ、包まれていきます。どれほどこの世で私たちの願望が満たされても、すなわち裕福になり、健康で長寿をたもち、温かい家庭を築き、趣味や娯楽を満喫し得たとしても、それらがやがて全て無窮の死の闇にのみ込まれていくほかなく、そういう大いなる不安に私たちがまわりつかれていることを阿弥陀仏は知りたもうておられるのでありましよう。

このような出口のない闇の中におかれている私たちのために願いをかけ、助ける働きとなつて「我が国に生まれるとおもえ」と喚びかけて、根本的な閉塞状態にある私たちにさわりなき道を開いてくださるのであります。

(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (十二)

普放無量無辺光  
無碍無对光炎王  
清浄歓喜智慧光  
不断難思無称光  
超日月光照塵刹  
一切群生蒙光照

(書き下し文)

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放つて、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

(現代語訳)

本願を成就された仏は、無量光・無辺光・無碍光・無对光・光炎王・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光とたたえられる光明を放つて、広くすべての国々を照らし、すべての衆生はその光明に照らされる。

D 「この部分は法蔵菩薩が

\*

阿弥陀仏の用きの働いていない処も時もないということですか」

\*

G 「仏の光明とはいわれますが、光明をどう理解したらいいのでしょうか」

D 「光明は仏の悟りの智慧のことだといわれています。仏の智慧を光明で表現されているのです」

G 「では仏の悟りの智慧とは」

D 「これを私たちが了解することは極めて難しいことですが、先達からお聞かせいただいたことで申します。仏の智慧は自他一如と悟っている智慧、知る働き(自)と知られる世界(他)とが事実として一体と認識している智慧、とお聞きしています。知られる世界と知る私とは、普通は離して考えています。それを迷いといいます。知られる対象とそれを知る働きは本来一つなのですね」

G 「ということは、外に客観的な事実があつて、それを私たちが知るといっているのではないのですか」

D 「ええそうなんです。知るといって主観がそのまま知られている客観である、ということですね。そういう道理を完

全に了知しているのを仏智といわれています。そういう意味では「世界がそのまま自己」とさつた智慧といえましよう」

\*

G 「仏の徳は「智慧と慈悲」といふ風に対にしてよく言われますが、慈悲はどういう意味ですか」

D 「自他一如と覚つた智慧は一切の生きとし生けるものを自己と団体と観(感知)する心ですから、一切の衆生を、自分自身あるいは我が子のように関心する慈悲として働くのです。ですから智慧は慈悲と離れないのです。仏の智慧と慈悲が仏の光明の一番基本の徳とお聞きしています」

G 「その光明が無量無辺であるというのはどういうことでしょうか」

D 「法蔵菩薩は修行成就して阿弥陀仏となられた、ということとは智慧と慈悲が無量(寿命)であつて、誰の上にも、どこにもこの智慧と慈悲は用いられていると釈尊は教えてくださるのであります。この働きはどうかの聖者たちの心の中だけにあるという限定されたものではなくて、いついかなるころにも満ち満ちて働いてく

ださっている、釈尊は仰せられています。不可思議としかいようはありません」

G 「たとえば、お釈迦様だけの心にある智慧と慈悲というのはなくて、あらゆる空間あらゆる時間を貫いて智慧と慈悲が働いているのですね」

D 「ええ、そう聞かせていただいています。そしてそのことをみずからの悟りによって感得し、<sup>へ</sup>確かに釈尊の仰せの通りです。私もその光明にあいました」と実証された多くの方々（諸仏）がおられるのです」

G 「諸仏は同じように仏の光明は無量無辺であることを感得されたのですね」

D 「ええそう伺います。華嚴経などにはそれが広く説かれていきます。そして親鸞聖人や蓮如上人は（私のような者も阿弥陀仏の光明にであいました。だからどうぞ阿弥陀様の光明にであってください）とお勧めくださるのです」

\*

G 「世界は仏の光に満ちているということが永劫変わらぬ真実とすれば、私の人生も私たちの世界も見方が変わってきますね」

D 「ええ、世界は仏の光に照

らされ、光明が働いていることを実感することが、悟りとも言われ信心とも言われるのでありましょう。ただし、光明が世界に満ちているといつても、私たちの多くは、満ちている光の一端に触れて、その無限性をかいま見る程度ではないでしょうか」

G 「かいま見ることであつても、信心は阿弥陀仏の光明にであうことなのです」

D 「そうですね。一筋の光にであうと、<sup>へ</sup>その光は無量無辺の光なんです」と仰せられる仏陀の御言葉に対して、

「そうなんだ」と同意することができるとのこと。そういう意味で光明は無量無辺であることに<sup>へ</sup>しかりをいふことができるのでしょうか」

G 「たとえば、真つ暗な洞窟の中にいる人が、ある日洞窟の一つに穴が空いて太陽の光が入ってきた時、その穴を通して空の広大さをかいま見るようなものなのでしょうか」

D 「そう思います。その洞窟から完全に出て大空を直に見るのは浄土で仏になったときではないでしょうか」

\*

G 「娑婆にいる私たちは無量無辺の仏の光明に包まれてい

て、その中にいるのだということ。これがあらゆる存在の根本の真相なのだということですね。本当に不可思議にして実に尊い真実ですね」

D 「ええ、そうなんです。それにもかかわらず、私たちは自分の迷いの思いの中に閉じこもって、娑婆だけではなくて地獄や餓鬼の領域をつくり、孤独で不安な人生や虚無的な人生を送りがちです」

G 「皆さんと輝く太陽の下にありながら、小さな、中が真つ暗な小屋の中に閉じこもっているようなものですね」

D 「そのことをもう少し思想的にいきますと、光明無量と寿命無量、智慧と慈悲といのちばかりない、そういう真実が世界の真相。その世界にありながら、そこに無明の風がふいて、<sup>へ</sup>我、我がもの」という迷妄の意識が生まれ、その意識に応じた身（形・個体）が現れてきたのでありましよう。それが迷いの衆生の有様ではないでしょうか。光明世界の中に、自と他を分けて執着する意識が起こる。それが衆生の世界を現出してくるのでありましよう。こうした意識の状態に応じたさまざま境界が迷いの境界あるいは六

道として仏教では説かれてい

\*

G 「ときどき、<sup>へ</sup>私たちは浄土から生まれ、浄土に帰るのだ」という話を聞きますが、私たちは光明無量・寿命無量の浄土から生まれたのでしょうか」

D 「私はそうは思いません。私もはもともと浄土にいたのではなくて、はかりなき光といのちのなかで、忽然として無明の意識が起こり、それが<sup>へ</sup>我」と<sup>へ</sup>我が身」を形成してきたと言われていますから、私の存在はどこまでも迷いの結果として形成されてきたものではないでしょうか。ですからこのたび浄土に生まれるのは、初めて到る世界といえましよう。もちろん、浄土から還相回向してこられた還相の菩薩はもと浄土からこられたのですから、もとの浄土に帰られるのでありましよう。しかし、私どもは

**無始流転の苦をすてて  
無上涅槃を期すること  
如来二種の回向の  
恩徳まことに謝しがたし**

と、ご和讃にあるごとく、このたび、無始以来の流転を脱して、初めて無上涅槃に至ら

していただくのでありましよう」

\*

G 「仏の光明は無量にして無辺であつて、この娑婆世界を照らし、いまこの私の処にすでに来て、私を包んでいてくださるのですね」

D 「ええそうなんです。ですからそれを私は<sup>へ</sup>阿弥陀仏、我らと共にまします」という句で表してきました。私が病気の時も、孤独の時も、周囲からつまはじきにされたときも、死の床についているときも、貧困にあえいでいるときも、阿弥陀仏は私と共にまします、という真実。これが私の生のよりどころとなり、死して帰入する場所となりたもうのです」

G 「阿弥陀仏はだれも共にいて下さる、にもかかわらずそのことを私たちは気がつかないのです」

D 「気がつかないばかりか、そのために不安と孤独と自分を高みに上げること、煩わされ悩まされ続けているのです。阿弥陀様はそんな私たちを喚びさまそうとして、南無阿弥陀仏となつて喚びかけてくださっているのです」

# 信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》十二

ゴシック体の文章が松並さんの言葉。

\*

○仏様が、私やあなたを救わんが為に  
とて、法蔵菩薩となり下り、世自在王  
仏のみもとにましまして、諸仏の浄土  
の因、国土人天の善悪をみそなわして、  
末代の私やあなたは、諸仏の浄土へは  
生れ難しと、見て知って、無上殊勝の  
願を起し、希有の大弘誓をたて、五劫  
の間御思案をなし下されて、南無阿弥  
陀仏とゆう本願を建てまして、私  
やあなたの悪業を、だいて、かかえて、  
長載永劫の修行の結果、南無阿弥陀仏  
に成りましたして、私やあなたの往生  
間違いないと「信」じて、願行具足して、  
十劫の昔に仕上げ、私やあなたを、  
血のたる「念い」で待ちわび、あたえて  
救わんと誓い玉う。

この御いわれを聞いて、この南無阿  
弥陀仏の中には、機法一体、名なり、  
声なり、お姿なり、お命なり、お体な  
り、御血潮なり、南無阿弥陀仏そのま  
まが声の仏様であります。即ち仏様か  
ら、仏様を頂いたのであります。頂い  
たことに成ります。

四十八願成就して、私やあなたの往  
生間違いないと「信」じてござるのです  
が、私共は疑い深いから、「重誓偈」に  
(四十八願の次に) 仏様が私共に重ね

て、「念」を押し過ぎて、私共はあ  
らためて「念」を押し必要はない。疑う  
余地はないのです。

「お経様」の「経」の字は「常」と読みま  
す。「常」とは何千年すぎても「かわら  
ぬ」ということであります。その重誓  
偈に

「我超世の願を建つ、必ず無上道に至  
らん、この願満足せずば 誓うて正覚  
を成ぜし。われ無量劫に於いて、大施  
主となりて、あまねく諸々の貧苦を救  
わずば、誓うて正覚を成ぜじ。我仏道  
を成ずるに至りて、名声十方に超えん、  
究竟して聞ゆる処なくば、誓うて正覚  
を成ぜじ」

と、誓い玉うた。その声が、今、現に  
この口から聞えて下さってあるのでは  
ありませんか。

一声のお念仏は、ここに居るぞ、連  
れてゆくぞ、迎えに来たぞ、間違わさ  
んぞの声なれば、心の模様は算用すん  
だ、何のさわりにもならぬ。動けば動  
けと捨ておいて(そのままに)、南無  
阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、この声を  
聞くよりほかに何の要もない。

仏様即ち南無阿弥陀仏だから、南無  
阿弥陀仏より、南無阿弥陀仏をたまわ  
りて、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏  
お阿弥陀様直々のお呼声であり、南無  
阿弥陀仏は、かならず救うぞの、大悲  
招喚の呼び声であります。

\*

(弥陀成仏のこのかた、私たちを待ちつ  
づけ、待ちわびたもう阿弥陀様が今この

口に現れたもう南無阿弥陀仏。それほど  
の大悲護念の親心とも知らずに長い間、  
親に背いてきた私である。

私が浄土に生まれたいと真実に願う心  
も、願いの通りに浄土に生まれるための  
修行(行)も、法蔵菩薩様は、私たちの  
ために、私たちに代わって、仕上げてく  
ださった。その阿弥陀仏の願と行の結果  
が、南無阿弥陀仏とできあがって、「汝は  
助かるぞ、助けるぞ」と喚びづめに喚ん  
で下さっている。(願行具足の南無阿弥陀  
仏)

この南無阿弥陀仏は機法一体の南無阿  
弥陀仏。信じる信心の機と信じるものを  
助けたもう法をすでに成就して、信じる  
機を南無の機とし、信じるものを助ける  
阿弥陀仏を法として、機も法も一体に成  
就して南無阿弥陀仏ができあがっている。  
(機法一体の南無阿弥陀仏)

それを私たちに聞かじめ、知らしめて  
くださる。念佛していることはその仰せ  
を南無阿弥陀仏と聞いていることなので  
ある。それゆえ、南無阿弥陀仏は「汝の  
助かる因はすべてできあがっているぞ、  
助かるぞ、助けるぞ」との喚び声であり、  
お知らせである。

これを南無阿弥陀仏の謂われという。  
この南無阿弥陀仏の謂われを「聞く」の  
である。

阿弥陀仏は重誓偈に「名声十方に超え  
ん 究竟して聞ゆる処なくば 誓うて正  
覚を成ぜじ」と十七願に重ねてお誓いく  
ださる。南無阿弥陀仏の本願のお助けを

名号として衆生に聞かせずにはおかない  
と、働いて下さっている。そのお働きが  
名号として今私の耳に聞こえてくる。ナ  
ムアマミダブツ、ナムアマミダブツと。

この一声に遇わせていただくのである。  
一声を聞くのであるが、永劫の幸せを聞  
くのである。

真に「聞く」というのは、真宗の法話  
を聞いて「なるほどなあ」「そういうお話  
なのか」と訳や理屈や道理を聞いて分か  
ることではない。そういう納得して分か  
ったと掴んでいるのを「聞く」とはいわ  
ない。それは道理や理屈が知性でわかっ  
ただけである。

分かったことは忘れたり、ぼけたりす  
ると無くなる。それは身に付いているの  
ではなく、心の表面にしばらく留まって  
いるだけである。

こちらの側から「分かりたい」「知りた  
い」「納得したい」と聞きにかかるが、そ  
の方向で聞こえるものではない。表面は  
聞いているが、実は自分の考えの中に取  
り込もうとしているのであって、自分の  
「知り分け」「聞き分け」で阿弥陀仏を掴  
まえようとしている。阿弥陀様の方に向  
いているようだが、実は反対側に走って  
いるのである。私の方で阿弥陀仏をつか  
まえるなら、私が阿弥陀仏を撰取しよう  
というのだから、阿弥陀仏に撰取される  
のとは反対方向である。

しかし、私たちは称えて、聞いて、考  
えて、読んで、何処までもそうするほ

かは無い。はからいを尽くしていくほかは無い。

いよいよ聞くことも出来ず、納得しても本当のところは分からず、全く無智無能の自分にはぶつかる。無仏法、無信心、助かりそうなものが何一つ無い私が最後に残る。

そこにお念仏の声はどう聞こえるか。

(了)